

## 定冠詞をどう教えるか

—— 既知性の観点から ——

伊 原 巧

### Teaching the Definite Article

—— from a viewpoint of givenness ——

Takumi IHARA

#### I. はじめに

日本人が英語を学習する過程で困難を感じる文法項目に冠詞がある。定冠詞なのか不定冠詞なのか、それとも無冠詞なのか。なかでも定冠詞の *the* については各種の教科書や文法書で数多く扱われているにもかかわらず、その運用となると誤りをおかす場合がよくある。

教育現場で定冠詞の *the* を教える場合、「2 度目に出てきたとき」とか、「ひとつしかないものに使う」と説明されることが多い。しかしこの説明だと、“I cannot play *the guitar*. I don't have a guitar.” では順序が逆になっているし、また前時に “This is *a picture*.” と教えておきながら、次の時間に “Look at *the picture*, class” について、ひとつしかないから定冠詞を使う、と教えるのは問題が残る。‘the earth’ や ‘the sun’ などはそれで説明がつくが、‘the stars’ となると説明が困難になる。また「それとわかっているものに使う」という説明も、“My brother is playing *a tape* now.” のように、眼前のものにも不定の表現を用いることもあることから、十分なものとは言えない。結局、「定冠詞は定まったものに用いる」という説明では、あまりにも漠然としていて、反例に抗しきれものではない。このように教育現場で統一性なく教えられている定冠詞に、体系的な指導ができる原理はないものだろうか。

五島・織田によると、定冠詞の働きは、その存在が確認され証明されていると話者が考え、とくに今そのものについて話したいと思っているのだということを暗示することにある。従って、目の前にあるものでも、そのような確認の手続きを経していない場合や、そのような手続きを不必要で余計なことと判断した場合は、話者は依然として *indefinite* な表現のほうをとるであろう。それでは、定冠詞 *the* による存在の確認あるいは証明とはどういうことか。その名詞の言及を特定の事物に限定する手続きとは、どのような認識構造にもとづくものなのか。

近年の言語学の発展につれて登場してきた文法領域の一つに談話文法がある。このなかで明らかにされた概念に、「旧情報・新情報」といった情報構造及びそれを取りまく関係概念があるが、この概念のなかに、ややもすれば旧情報・新情報の概念と混同されることの多い「既知・未知」の概念がある。これらのうちの「既知」という概念こそ存在の確認と証明及

びその手続きを扱う概念であり、定冠詞 the によるそれらを明らかにする上で依拠すべき概念であるように思える。そこで本稿では、まず、既知の概念を明らかにし、次に、それにもとづいて定冠詞の働きと定冠詞による認識構造を考察する。そして最後に、この考察から定冠詞の統一性のある指導をする上での指針を考えてみることにする。

## II. 既知の概念

この概念を正確に把握するために、まず、柴谷を見てみよう<sup>2)</sup>。柴谷は次のように特徴づけている。

- ①会話の場において、会話の参加者が間違いなく見極められるもの。
- ②会話の場に(a)直接的に既に紹介されているもの、及び(b)間接的に既に紹介されているもの。
- ③普遍的なもので、指示対象が一つしかないもの。

また、安井は既知項目を示す言語表現として、定であるとされる表現である場合と、総称的である場合とがあるとしている<sup>3)</sup>。

定の表現は、普通、the や人称代名詞や指示詞などによって表わされるが、これは、話者と聞き手が共有する脈絡的知識のなかに唯一的に同定され得る指示対象物が何かあると話者が理解していることを伝え<sup>4)</sup>、その理解は場面と文脈を依りどころとする。文脈は、さらに、失行する文脈と後続する文脈の二つに分かれる。場面に依存している場合を外部照応的、先行文脈に依存している場合を前方照応的、後続文脈に依存している場合を後方照応的と呼ぶ<sup>5)</sup>。

総称的である場合とは、名詞の単数形か複数形がある種属・種類に属するもの全体を表わす場合であり、Jespersen の言う総称単数・総称複数<sup>6)</sup>にあたる。

では次に、柴谷の定義する既知の概念を、安井の言う言語表現や、照応形も考え合わせながら、検討していくことにしよう。

①の場合は、定である表現で外部照応的な場合であると見ることができる。定である表現のなかでも、(1)の that boy に見られるように、指示詞を伴う場合が多い。

(1) Look at that boy.

柴谷は眼前にない(外部照応的でない)ものでも、会話の参加者に共有されている情報で、間違いなく見極められるものも①の範疇に入るとしている。例えば、(2)の John は二人の会話者の登場人物リストにすでに登録済みのものであって、外部照応的なものではない。

(2) Who said so?

John did.

しかし、このような場合の John は①の範疇に入れない方がよいと思える。そもそも既知項目とはいずれの場合も会話の参加者に間違いなく見極められるものであるはずであり、従って、柴谷が①で言う「間違いなく見極められるもの」とは、(1)の that boy のように、「場面に依存して間違いなく見極められるもの」の意味に限定しておく方がよいと思えるからである。(2)の John のように、場面依存でなく、だからと言って文脈依存でもなく、すでに会話

者の登場人物・事物リストに登録済みとされる項目は、むしろ③の範疇に近いものと思われる。

②は文脈依存である。②の(a)には、まず、定である表現で、前方照応的な場合があげられる。例えば、(3)のように、前方照応の定冠詞を伴う場合がある。

(3) He gave me a book yesterday. I found the book quite easy.

また、後方照応的な場合もあげられる。これは一文内である項目の紹介とその既知化を同時に行う方法である。例えば、制限的關係詞節を伴った定名詞句表現がそれである。

(4) The river which flows through London is the Thames.

この the は river だけにつくのではなく、[the] [river which flows through London] と分析されるべきもので、その基底にある構造は [the Δ] [a (certain) river flows through London] と考えられる<sup>7)</sup>。つまり「ある川がロンドンを流れている」「その川」という制限付きの名詞で、關係詞節のなかにある river を先行詞の位置に移して、あとから先行詞ができたものである。従って、(4)は(5)の二文を一つにつないで縮めたものと考えることができる。

(5) A river flows through London. The river is the Thames.

このように考えると、(4)の後方照応の定冠詞は、(5)の前方照応の定冠詞の変異形と見こともでき、その限りにおいて、これは、なぜ②の(a)の「直接的に既に紹介されているもの」の範疇に後方照応的な場合が含まれるのかを説明してくれていることにもなる。

しかし、定冠詞の機能という視点から見れば、前方照応、後方照応のいずれであろうとも、定冠詞は、すべて、格下げ文である制限的關係詞節に対応する機能をもっていると考えることができる。例えば、(6)の二文を一つにつないで縮めた、句の形をとる(7)と(8)と等価である<sup>8)</sup>。

(6) There is, as you know, a house on the corner. The house is for sale.

(7) The house on the corner is for sale.

(8) The house which is on the corner is for sale.

また、この定冠詞の機能は、定冠詞以外の各種の定の表現にも通じる。例えば、「所有形限定詞＋主要名詞」の形をとる(9)の My house は(10)の二文を一つにつないで縮めた(11)と等価である。

(9) My house is big.

(10) I have a house. The house is big.

(11) The house which I have is big.

さらに、前方照応の人称代名詞 he も the male person that was just mentioned に還元することができる。

このように考えてくると、①の場合の(1)の外部照応的な that boy も the boy who is out there と還元することができ、既知項目の基本形は「後方照応的定冠詞＋主要名詞＋制限的關係詞節」ではないかとの見通しがたてられることになる。

ところで、ある項目が既知項目であると認定されるには、上で見た例や(12a)からわかるように、ある項目とその先行詞との間に同一物を指示する関係がなければならぬ。また、

(12b) のように、両者の間に包摂関係がある場合も、その項目は既知項目とみなしてよい。しかし、(12c) のように、両者に排除の関係がある場合、その項目は既知項目ではなく、未知項目とみなすべきである。

(12) There's a boy climbing that tree.

- a. The boy's going to fall if he doesn't take care.
- b. Those boy's are always getting into mischief.
- c. And there's another boy standing underneath.<sup>9)</sup>

(12)の例は、発話の連続性や結束性に語彙レベルが関わることを示してくれているが、これはまた、既知・未知の概念が単に形態上同じ語彙が先行文脈に現れたか否かによって決定されるべきものではなく、指示対象が同定できるか否かによって決定されるべきものであることも示してくれている。

このように考えてくると、指示対象が同定できる限りにおいて、既知項目はその先行詞と異なる語彙形態をとってもよいことになる。これを Halliday & Hasan は次のように分類している<sup>10)</sup>。

(13) 1. Reiteration

- a. same word (repetition)
- b. synonym (or near-synonym)
- c. superordinate
- d. general word

2. Collocation

(13)の1の a-d にそれぞれ対応する例は(14)の a-d である。

(14) There's a boy climbing that tree.

- a. The boy's going to fall if he doesn't take care.
- b. The lad's going to fall if he doesn't take care.
- c. The child's going to fall if he doesn't take care.
- d. The idiot's going to fall if he doesn't take care.

そして(13)の2の Collocation が柴谷の言う②の(b)の「間接的に既に紹介されているもの」に対応することになる。

②の(b)について、柴谷は、例えば「家」を紹介すれば、それに付随する屋根とか、庭とか、台所とかいったものも付随的に紹介されたことになる、と述べている<sup>11)</sup>。

(15) He built a house near the park. The roof is red, the garden is large, and the kitchen faces a street.

その他の例として、candle—the flame, box—the lid, face—the chin, book—the reader など考えられる。

②の(b)が①や②の(a)と異なるところは、既知項目とされる項目の指示対象が、文脈中のある項目からの推論によって、同定されているということである。これは、いわゆる「橋わたし」と呼ばれるものであるが、これが語彙形態のレベルでは、Halliday & Hasan の言う

collocation となる。同様の例は日本語にも見られ、(16)では、ビールは太郎のリュックに入っていたビールで、既知項目となる。

(16) 太郎はリュックを点検した。ビールはなまぬるかった<sup>12)</sup>。

②の(b)の場合も、定である表現で、前方照応の場合と後方照応の場合があるが、基本的には先に述べた「後方照応的定冠詞+主要名詞+制限的關係詞節」とみることができる。例えば、(15)の前方照応詞 the roof は the roof that the house has に還元できることからわかる。

③の例として、柴谷は、太陽や月や人間などのように、それが指す対象物が一義的に決まっている場合をあげている。これらを英語で表現した the sun や the moon の定冠詞は指標の the であり<sup>13)</sup>、men は種族の特定固体を示すのではなくて、全体を示す総称名詞である。これらが既知項目とされるのは、それらの普遍性と唯一性ゆえに誰もが同定できるからだ、と理解できる。ところが、我々が普遍性や唯一性の判断の依りどころにするものは、我々人間の経験に裏打ちされた知識である。すなわち、我々には、人物や事物に関して、会話の場面にも文脈にも依存しない経験的知識がすでにあり、それによってある項目の指示対象を同定することもできるのである。そうだとすれば、柴谷が③で言う内容を拡大し、それを経験的知識という枠組で捉えなおしてはどうだろうか。この枠組で捉えると、場面と文脈からこぼれるすべての既知項目を一括して捉えることができるからである。(2)の John を登場人物・事物リストに登録済みのものと呼んだのは、実は、この経験的知識のことであり、この John を③に近いものと述べたのもこの理由による。

ところで経験的知識には、柴谷の言う普遍的なものもあれば、(2)の John のようにある特定の聞き手にしか有効でないものもある。すなわち、既知か未知かが聞き手の経験的知識に左右される場合があるということである。しかしながら、発話が聞き手のためのものであって、話者が聞き手の経験的知識を査定しながら発話するものである以上、既知か未知かが聞き手に左右されることのあるのはさけられないことである。むしろ、既知か未知かを、聞き手に独立して普遍的または唯一的に捉えようとするところに無理があることを、ここで明確にしておく必要がある。

経験的知識によって既知とされる項目の表現は多様で、①、②のように、定である表現だと一様に記述することができない。the sun, the moon のように指標の the で表現されるものもあれば、「定冠詞+単数名詞」、「不定冠詞+単数名詞」、「冠詞を伴わない複数名詞」の形をとる総称表現もある。さらに、固定名詞の形をとる場合もある。しかし、表面上多様な形をとるこれらの既知項目も、基本的には①、②と同様、「後方照応的定冠詞+主要名詞+制限的關係詞節」に還元できると思われる。例えば the moon は the moon of the earth であり、これは the moon that belongs to the earth となる。「定冠詞+単数名詞」の形をとる総称表現は、例えば、(17)から(18)に還元され得る<sup>14)</sup>。

(17) The dog is a faithful animal.

(18) The species which is called a dog is a faithful animal.

また固有名詞については、例えば(2)の John ならば、意味上、the John whom both of us know とか the John who is our friend などのように、聞き手の経験的知識の内容に応じて

還元することができる。

以上のように検討してみると、既知項目とは、聞き手がその指示対象物を場面や直接的・間接的文脈や経験的知識から同定でき得る（と話し手が思っている）ものであり、定の表現、総称表現、指標の *the*、固有名詞といった表現形式をとるが、基本的には「後方照応的定冠詞＋主要名詞＋制限的關係詞」に還元できるもの、とまとめることができる。

### III. 定冠詞の働きと定冠詞による認識構造

I章で、定冠詞の働きは、その存在が確認され証明されていると話者が考え、とくに今そのものについて話したいと思っているのだということを予示することにある、と述べた。この存在の確認と証明とは、まさにII章で考察した、指示対象物の同定、すなわち既知化と軌を一にする。そこでここでは、定冠詞による存在の確認と証明の依りどころを既知化のそれに求めて、定冠詞の働きと定冠詞による認識構造を考察してみよう。

#### 1. 場面依存の場合

これは、状況や環境から聞き手が間違いなく見極められると話者が考えている場合のことであり、この場合に用いられる定冠詞は外部照応的 (exophoric) の *the* である。歴史的に *the* の源が指示代名詞 *that* であったことからして、直示性をもつこの用法は定冠詞のなかで最も基本的な用法と言えよう。

(19) Shut *the window*, please.

#### 2. 文脈依存の場合

##### (a) 直接的依存

これは、先行文脈か後続文脈から聞き手が間違いなく見極められると話者が考えている場合のことであり、先行文脈に依存する場合に用いられる定冠詞は前方照応的 (anaphoric) の *the* と呼ばれる。具体的には、まず、不定冠詞で紹介しておき、聞き手にある認識を与えておいて、その後 *the* で特定化する場合のことで、学校文法では「一度話題に上ったもの」と説明されることが多い。

(20) A man has come to the door. *The man* wants to see you.

後続文脈に依存する場合に用いられる定冠詞は後方照応的 (cataphoric) の *the* である。これはII章でふれたように、一文内である項目の紹介とその既知化を同時に行う方法である。具体的には、形容詞及び形容詞相当句などにより、ある限定をして理解を与え、*the* で特定化を行う。学校文法では「修飾語句に限定されている場合」と説明されることが多く、この典型は制限的關係詞節の先行詞につく *the* であると言える。

(21) *The apartment house that he lives in* is thirty stories high.

##### (b) 間接的依存

これは、先行文脈のある項目からの推論で聞き手が間違いなく見極められると話者が考えている場合のことである。具体的には、ある項目が示されているときに、それが紹介の役目をつとめ、それに関係している他の項目を *the* で特定化する。例えば、*a war* と言っておいて、その *war* に関する話ならば、*the cause, the outbreak, the peace* と言いうる。

### 3. 経験的知識依存の場合

これは、人間の経験的知識から聞き手が間違いなく見極められると話者が考えている場合のことである。しかし、これには問題がある。まず、人間の経験的知識には個人や文化の違いによって質的にも量的にも多様性があることから、この不確実性の高いものに依存して正確な確認に到達できるのかという点であり、次には、存在確認の依りどころをこの枠組で捉えた場合、これで場面と文脈からこぼれおちる他のすべての定冠詞の用法を説明しきれぬのかという点である。

まず前者の問題であるが、これに対する答えは、これで正確な確認に到達できるということである。現に経験的知識に依存して英語によるコミュニケーションが行われているという事実がその証拠となる。従って、経験的知識に依存できるということは、それを保証する、経験的知識に関わる、定冠詞特有の認識構造があるということであり、その構造の解明が求められることになる。そして後者の問題は、この解明を行うなかで吟味していくことにする。

五島・織田は、定冠詞による指示言及の対象が前もって示されておらず、その特定化認識が、いわば抜き打ち的におこなわれる場合があり、このような場合の認識形態には、大きく言って次の三つの場合があるとしている<sup>15)</sup>。

i) 同じ名詞で呼ばれる同じ種類の他のものに対して

{ $X_1, X_2, [X_3], X_4, X_5 \dots$ } (that member of a class)

Look at that boy in *the red jacket*.

Is your classroom on *the first floor*?

ii) 他の名詞で呼ばれる他のいくつかの種類に対して

{ $V, W, [X], Y, Z, \dots$ } (that class)

Do you play *the piano* every day?

Is Monday the first day of *the week*?

iii) それ自体で、すでに明確に特定化されていると感じられるもの

{ $\dots [X] \dots$ } (that member of that class)

Look, Lucy. *The mailman* is coming to us.

Where is *the hammer*, Father?

これらの特定化認識が、場面や文脈にたよらず、いわば、「抜き打ち的」に行われるということは、それを保証する何らかの依りどころがあるはずであり、その依りどころが我々の言う経験的知識だと考えることができる。

上記の認識構造に共通して見られる特徴は、クラスやメンバーが他のクラスやメンバーと対比の上で捉えられている点と、集合化の仕方が、すなわち「もの」に対する見方が、英語特有の経験的知識に関わっている点である。

i) は、例えば、jacket と呼ばれるクラスのなかの、黒や白や青のメンバーとは異なるあの「赤」の jacket というように、メンバーへ対比的な指示的特定を行うことによって、聞き手が間違いなく見極められると話者が考えている場合のことである。この場合、英語ではどのような衣類が jacket というクラスに集合化されるのか、また、red の示す範囲はど

こまでかという英語特有の経験的知識がなければ、この特定化は不可能になる。学校文法で「序数や最上級には the をつける」と説明されるものがこの典型である。

ii) では特定化の対象となっているのはクラスであって、個々のメンバーではない。これは、例えば、英語特有の経験的知識によってくくれる {violin, guitar, piano, flute...organ} という楽器の集合のなかでの piano というように、ピアノのクラスへ対比的な特定指示を表わすことによって、聞き手が間違いなく見極められると話者が考えている場合のことである。学校文法で「楽器名には the をつける」と説明されるのがこれにあたる。

また、学校文法で「部分を示す the」と呼ばれる“*I took him by the hand.*”も、いま話題にしている彼の身体という大枠のなかで、英語特有の経験的知識にもとづいて {shoulder, head, [hand], arm...leg} という集合を設定し、そのなかから特定のクラスを指示している。さらに「慣用的な場合の the」として扱われることの多い、‘in the morning’ は、人間の一日の活動期間を英語特有の経験的知識にもとづいて三分割した {morning, afternoon, evening} という集合でくくり、その境界設定のなかで特定化している。また、季節名のなかで、the をつけることが一番多いと言われる spring にしても<sup>16)</sup>、“*In the spring I take a week's holiday.*” (私は春に一週間の休暇を [いつも] とります。)<sup>17)</sup> の場合は、{[spring], summer, fall, winter} という集合のなかでの特定化であるが、“*In the spring I shall take a week's holiday.*” (私は [この] 春に一週間の休暇をとります。)<sup>18)</sup> の場合は、来年や再来年の春ではなく、今年の「春」というように、i) で見た { $X_1, X_2, [X_3], X_4 \dots$ } の形での特定化である。

その他、同様の種類の特定化は、「単位を表す the」の“*by the pound*”や「田舎・地方の意味を表す the」の“*in the country*”についても言える。前者は「単位」という集合のなかでの特定化であり、後者の場合は、自然の景観あるいは生活環境のような受けとり方をして、{city, [country]} という集合の形での特定化である。また、“*I am the teacher. You are the student.*”も二人の人物が登場してきて、{teacher, student} という経験的設定のなかでの特定化である。しかし何と言っても、ii) の典型は、“*The dog is a friend of men.*”のように、{tiger, lion, dog, elephant...} という経験的集合のなかでの dog といった、「種族全体を表す the」であろう。

このように見てくると、この定冠詞の用法において、話者の思いを支配しているのは、かなり観念的に把握された種類の性質・特徴であることに気がつく。従って、the による種類の代表表現が、抽象的概念化の傾向を帯び、“*The sight of her baby roused the mother in her.*”のような「抽象の意を表す the」として用いられるのも納得できることになる。

iii) は、例えば、英語文化には毎日やって来る人の集合の一つに mailman というものがあり、そのなかの毎日わが家にやって来るあの「mailman」というように、対比が経験的知識にもとづく自発的自己限定の形で行われることによって、特定化が行われる場合のことである。これは、例えば the sun や the moon や the sky のように、「誰にでも知れていてすぐそれとわかるものにつける the」とか「唯一物につける the」と説明されるものがその典型であるが、「固有名詞につける the」もこの種の特定化と言えよう。そしてこれらの依りど



ころとなる経験的知識には、the sun や the moon のようにいずれの英語の話者にも普遍的に共有されている場合と、the mailman や the hammer のようにある会話の場の話し手と聞き手にのみ共有されている場合とがある。

以上のように定冠詞の働きを分析していけば、ここで取り上げられなかった他の定冠詞の用法も、3のi) からiii) のいずれかに分類されていくものと思われるし、定冠詞の用法が何であれ、すべてが、既知化の基本的意味である「～するところのその一」に集約されていくことにも気が付く。このことは従来、相互の関連なく教えられていた定冠詞が統一性をもって教えられることを示唆しており、英語教育で定冠詞を指導していく上で一定の指針を与えてくれることになる。

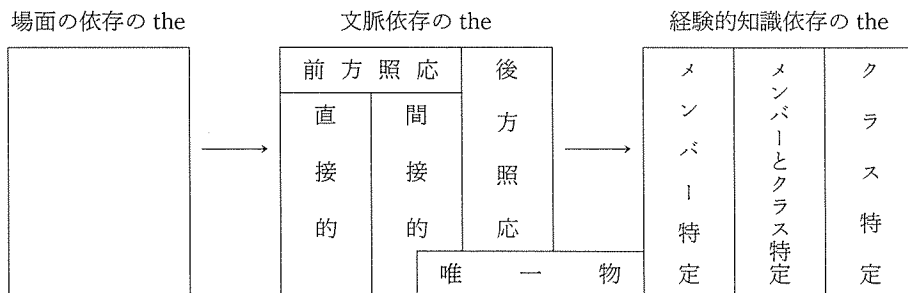
#### IV. 定冠詞指導の指針

##### 1. 定冠詞の用法の配列

定冠詞の用法を理解させるには、他の文法項目と同様、その配列が大きな意味をもつ。ところで、定冠詞は人やものの存在の確認や証明を予示するものであった。そこでシラバスを構成する上では、原則的に、存在の確認や証明の容易なものからそうでないものへ配列するのが妥当と考えられる。すなわち、誰が見てもすぐに確認できる「場面依存」から、聞いたか読みだりすることによって確認ができる「文脈依存」、そして英語特有の集合化の知識があることによって確認ができる「経験的知識依存」へという順序が基本となる。

ただし、文脈依存には、後方照応的な the や文脈に間接的に依存する the といった理解がやや容易でないと思われるものがある一方、経験的知識依存には、the sun や the moon のように、唯一的で生徒の身近にあることから理解が比較的容易だと思われるものもある。後方照応的な the は日本語にない後置修飾を伴うため、その扱いは後置修飾の出現までまたなければならぬが、文脈に間接的に依存する the は前方照応的である上に、先行項目からの推論が日本語による推論に助けられる場合も多いことから、これは後方照応的な the に先行させるのがよい。また「唯一物の the」は先に述べた理由から、生徒の定冠詞理解の道筋を防げない範囲で前置していく。経験的知識依存の他の用法については、集合化の仕方と、特定化対象がメンバーかクラスかの見分けが生徒には容易ではないと思われるため、後に配置する。そしてこれらの用法内の配列については、i) (メンバー特定) → iii) (メンバーとク

図 1



ラス特定) → ii) (クラス特定) の順にする。これは、メンバー特定は具体的な個の直接的な特定で済むが、クラス特定はさらに上位の集合のなかでの種類特定であり、その集合化の方法に日本語とは異なる英語特有の経験的知識が関わる場合があるからである。以上のことを明示すると、配列は前ページの図1のようにするのがよいと思われる。

## 2. 定冠詞の意味・用法の理解

定冠詞は人やものの存在の確認や証明を予示するとともに、基本的には「後方照応的定冠詞＋主要名詞＋制限的關係詞」に還元できるものであった。この内容を理解させるために、入門期の生徒への指導では、上で見た配列の順序に従って、「見てすぐにわかる人やものにつける」との理解をさせることを出発点としたい。この導入の具体例として、升川<sup>19)</sup>は、That glass is on that table.と that がいかにもうさそうに言っておいて、両手をうしろに回して指させないようにして that をだんだん弱く発音していき、The glass is on the table.を導入する手順を述べている。

次に「一度話題に上った人やものにつける」との理解にすすむ。この特定化は日本語にもあり、理解は容易だと思われる。これが定着すれば、次の「一度話題に上った人やものとの関係のある人やものにつける」との理解にすすむが、このあたりから、定冠詞の基本的意味である「～するところのその一」を明示化していく。例えば、場面依存の“Look at *the table*.”なら「(そこに見えるその) テーブル」、前方照応の“*There is a park in my town. The park is very beautiful.*”なら「(私の町にあるその) 公園」、前方照応でも先行文脈に間接的に依存する“*I bought a book yesterday. The story was very interesting.*”なら「(昨日買った本のその) ストーリー」という理解の仕方である。すなわち、the を単に「その」と教えるのではなく、the の照応対象との関わりを明確に把握させるなかで理解させ定着させていくのである。このような捉え方に慣れさせていけば、次に出てくる後方照応や経験的知識依存の定冠詞の理解も容易になる。後方照応の“*The apartment house that he lives in is thirty stories high.*”なら「彼が住んでいる(その) アパート」、経験的知識依存でメンバーとクラスを特定する“*Where is the hammer, Father?*”なら「(このことをするにはハンマーというものを必要とするが、そのなかで我々が普段使用しているその) ハンマー」、経験的知識依存でクラスを特定する“*The whale is a mammal.*”なら「くじらと呼ばれる(その種のもの)」という具合である。また、前置してもよいとした唯一物の the は「唯一物には the をつける」という説明ですませてもよいが、“*the moon*”なら「(地球にあるその) 月」と理解させる。

このような手順で指導していけば、定冠詞の体系的な理解を可能にする指導ができるのではないだろうか。なお、このような認識の定着には、具体例を数多くインプットし、推測力を活用させながら理解させていくのが有効だと思われるが、その過程で、この認識のパターンに沿った日本語訳を一定させてみるのも一助となるであろう。

## V. 結 語

統一性のある定冠詞指導の指針を考えるにあたり、まず、既知の概念を明らかにした。こ

これは、既知の概念が、存在の確認と証明及びその手続を扱う概念であるからであった。その結果、存在の確認と証明の依りどころとして、場面、文脈（直接的、間接的）、経験的知識の三つがあることが明確になった。次に、これら三つの依りどころに沿って定冠詞の働きと定冠詞による認識構造を分析した。最後に、この分析に基づき、定冠詞の配列及び意味・用法に関する指導の指針を考えてみた。その結果、まず、定冠詞の用法の配列は、場面、文脈、経験的知識の順に並べることを基本とすること、ただし唯一物の the については適宜前に配置してよいこと、経験的知識については、メンバー特定、メンバーとクラス特定、クラス特定の順にすること、とした。次に定冠詞の意味・用法の理解については、定冠詞の照応対象との関わりを明確に把握させるなかで理解させていくと統一性のある指導ができるとした。

定冠詞は日本語にない上に、その指導に一貫性がなかったため、日本人学習者にとっては誤りをおかしやすい文法項目であった。ここで提案した指針が妥当か否かは実践を通しての検証を受けねばならないが、その前に、この指針を指導上どのように具体化するのか、どのような手だてで教えるのがよいのかといった問題が残っている。次の課題である。

#### 註および参考文献

- 1) 五島忠久・織田 稔 1977 『英語科教育 基礎と臨床』 研究社 38頁
- 2) 柴谷方良 1978 『日本語の分析』 大修館 213頁
- 3) 安井 稔 1978 『新しい聞き手の文法』 大修館 196頁
- 4) Leech, G., 1983, *Principles of Pragmatics*, Longman, p. 90.
- 5) Halliday, M. A. K. and R. Hasan, 1976, *Cohesion in English*, Longman, p. 33.
- 6) Jespersen, O., 1914, *A Modern English Grammar on Historical Principles II*, Allen & Unwin, pp. 131-135.
- 7) 中島文雄 1980 『英語の構造 上』 岩波書店 27頁
- 8) 註3)の文献の207頁
- 9) 註5)の文献の283頁
- 10) 註5)の文献の279-280頁
- 11) 註2)の文献の214頁
- 12) 茂呂雄二 1984 「テキスト・談話論の用語」『言語生活』No. 393 筑摩書房
- 13) Quirk, R. et al. 1972, *A Grammar of Contemporary English*, Longman, p. 156.
- 14) 「不定冠詞+単数名詞」や「冠詞を伴わない複数名詞」の形をとる総称表現は、それらが any や普遍限量詞を含む文と等価であることを示しているものと考えられる（安井、註3）の文献の224頁）ので、それらも結局は「後方照応的定冠詞+主要名詞+制限的關係詞節」に還元できると思われる。
- 15) 註1)の文献の38-39頁
- 16) 一色マサ子 1954 『冠詞』 研究社 42頁
- 17) 註1)の文献の41頁
- 18) 註1)の文献の41頁
- 19) 升川 潔 1982 『使える英文法へ』 開隆堂 84-86頁

(1991年8月23日 受理)